

海外セレブリティの発言の日本語訳における女性的表現 女性ファッション誌VOGUEJAPANの記事から

著者	前川 愛歩
雑誌名	論文集 / 金沢大学人間社会学域経済学類社会言語学演習 [編]
巻	16
ページ	33-52
発行年	2021-03-20
URL	http://doi.org/10.24517/00061880



海外セレブリティの発言の日本語訳における女性的表現 ——女性ファッション誌 *VOGUE JAPAN*の記事から——

人間社会学域経済学類 4年 前川 愛歩

<概要>

近年、自然談話において言語的ジェンダー表現は弱くなっていると指摘されている。一方で、海外セレブリティの発言は最近でも「～わ」「～よ」などの言語的ジェンダー表現を用いて訳されているのを目にすることが多い。本研究では、女性ファッション誌 *VOGUE JAPAN*の記事を検証し、女性セレブリティの発言がどの程度女性らしく訳されているのかを調査した。その結果、言語的ジェンダー表現は減少傾向にあるとわかった。

<キーワード>

女性雑誌、言語的ジェンダー表現、性差、「女性らしさ」

<目 次>

1. はじめに
 2. 問題提起
 - 2.1. 背景
 - 2.2. 目的
 - 2.3. 先行研究
 - 2.3.1. 自然談話の言語的ジェンダー表現
 - 2.3.2. フィクション作品の言語的ジェンダー表現
 - 2.4. 仮説
 3. 調査方法
 - 3.1. 調査対象
 - 3.2. 調査方法
 4. 結果
 5. 考察
 6. おわりに
- 文献

1. はじめに

近年、男女の言葉遣いは互いに接近していると指摘されている。言語学において「女性語」あるいは「女ことば」とされてきたような女性的言語表現が女性によって実際に使用されるのを我々が日常の自然談話で耳にすることは少ないであろう。海外の映画やドラマの女性キャラクターのセリフの中には見られるが、一部の研究ではそれも減少傾向が示唆されている。では、実在人物のうち日本語話者でない者の発言が日本語に訳されたものはどうであろうか。本研究は女性雑誌において日本語話者でない女性セレブリティによる発言がどの程度女性らしく訳されているかを調査する。本研究により、時代を映す鏡であるセレブリティの人物像がどのように発信されるかについて近年の動向をつかむことができると考える。

2. 問題提起

2.1. 背景

社会における女性の地位向上は日本でも長らく取り組まれてきたことであるが、未だ課題は多い。2020年日本のジェンダー・ギャップ指数（経済、政治、教育、健康の分野から計算して国ごとの男女格差の程度を比較できるようにしたもの）は0.652で、ランキングは世界153カ国中121位¹であった。これは日本における男女格差が非常に深刻であることを示している。

そのような社会においてメディアは非常に強く影響してきたと言える。完全にではなくても、メディアは個人の生き方やものの考え方にも影響を与えるからである。このことについて井上ほか（1995）は「メディアの描く女性像には、その時代のその社会が期待する、女性の姿かたちや生き方や、あるいは『女らしさ』といった、女についての規範が表現されている。（中略）メディアが男性によって支配されているとき、メディアの描く女性像は、男から女への要求と期待の表現であり、その要求と期待を女性が内面化することで、女性自身の現実も男たちの要求と期待に添うように方向づけられてしまう」（p. 2）と説明する。また、水田（2005）は「女らしさの規範を文化として再生産し、持続させていく過程において、メディアは根幹的な力を発揮してきた」と指摘し、メディアの影響力を逃れることの難しさについて「単にテキストへの反論や解釈のし直しだけではすまされない。（中略）家族や自分を取り巻く最も個人的な環境への批判、そして自分の願望や夢など内面への疑問、考え直しを必要としたのである」（p. 24-25）と述べている。そしてそのような行動は「家族や家庭、教師や学校、友人や自分自身をも相手どった（中略）闘い」（p. 25）であると主張している。

一方で、メディアはその強い影響力ゆえに、発信者次第で社会的抑圧に苦しむ女性たちを助け、励まし、導くことも可能である。中でも女性雑誌は作り手も読

¹ 「男女共同参画局世界経済フォーラムが『ジェンダー・ギャップ指数2020』を公表」内閣府男女共同参画局『共同参画』2020年3・4月号

https://www.gender.go.jp/public/kyodosankaku/2019/202003/202003_07.html

み手も女性が多いことから、社会における女性の地位向上に積極的な姿勢であると期待される。

女性雑誌はしばしばセレブリティ（有名人、芸能人）について発信する。セレブリティはその時代のその社会を映す鏡であるだけでなく、人々を魅了し、社会を牽引する存在である。セレブリティの生き方や考え方を紹介することで、日々の生活を懸命にこなす読み手に対し、間接的に手がかりや希望などを与えることもできる。

取り上げられるセレブリティが日本語話者の場合、セレブリティの発言は用いられた言葉どおりに発信されると考えてよいだろう。しかしセレブリティが日本語話者でない場合は、単に翻訳されるだけでなく何らかのフィルターがかけられている場合も考えられる。具体的にはジェンダー的特徴のある言語表現の使用などである。

例 1) 私はとてもシンプルな生活をする家で育ったの。

周りは農場で、祖父母は自分が食べる野菜を育てていたわ。

だから私も、小さなころから、オーガニックな物を食べることの大事さを知っていたの。

料理は祖母に教わったわ。

今ではすっかり身について、家でも自分で料理をしているの。

料理って、本当に楽しいのよ。²

上の例では女性的な印象を与える文末表現が多用されており、話し手の性自認が女性であると推測できる。本研究では日本語話者でないセレブリティの発言の日本語訳において言語的ジェンダー表現がどの程度使用されているか検証し、ここ数年の動向を概観する。

2.2. 目的

本研究の目的は2つある。1つは、女性雑誌の日本語記事に登場する日本語話者でない女性セレブリティの発言に注目し、どの程度女性らしく訳されているかを分析することである。もう1つは、分析結果を年ごとに比較し、言語表現に表れる女性らしさの程度がどのように変わっているか考察することである。

2.3. 先行研究

日本語話者でないセレブリティの発言は、実在人物から発せられた自然な言葉でありながら、例1のようにフィクショナルな印象を与える言葉遣いで訳される場合が多い。このことから、言語的ジェンダー表現についての先行研究には

² 「ミランダ・カーが実践する、5つのビューティ流儀」VOGUE JAPAN 2013年09月05日 https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/VJ102-Interview-2013-00_V170_MirandaKerrBeauty

自然談話についてのものと、フィクション作品についてのものをそれぞれ 1 点ずつ取り上げる。

2.3.1. 自然談話の言語的ジェンダー表現

自然談話の言語的ジェンダー表現に関する先行研究として高崎 (2004) を取り上げる。高崎 (2004) は考察の前提において、これまでの研究における「女性語」の捉え方や、「女性語」の存在に対して疑義が持たれていること、「女性語」の使用が実際には減っていることをまとめている。まず『国語学大辞典』を引用し、日本語学の中における「女性語」の位置づけを確認している。『国語学大辞典』によると男性の用いるすべてのことばを男性語といい、女性の用いるすべてのことばを女性語という。狭義には、その差の顕著なものについていう。女性語の特質として以下の 7 点を挙げている。(p. 350)

1. 女性特有の単語を使う
2. 漢語などの固いことばや野卑な、下品なことばを避ける
3. 間投詞や終助詞などの強意語を多く使う。女性特有のものがある
4. 敬語的表現、丁寧な言い方、婉曲な物言いや言い切らない表現が多い
5. 音域が比較的高音部に属する
6. 抑揚や音の強調などが変化に富む
7. 変体がなを好んで使う

また、女性語を支える要因として、第一に女性としての生理的、感情的な条件から自然に生ずる面、第二に女性の社会的、家庭的な地位、環境の伝統的なあり方に根ざす面を述べている。また、第二の要因に関連して、女性の身分・環境・教養等が男性と著しく相違した江戸時代などと比べ現代は女性語が現われにくい時代と言える論じている。

次に「女性語」の存在に疑義を唱えた研究として『女性のことば・職場編』(1997)、『男性のことば・職場編』(2002) を取り上げ、自然談話データを分析した論文において従来「女性語」の特徴とされていたものがそれほど多く出ていないことを紹介している。また、男女の言葉遣いの接近を論じた高崎 (1988) を取り上げ、「男は仕事・女は家庭」という従来ジェンダー規範にとらわれない女性の登場が、言葉遣いにおける脱「女性語」化の原因であるという見解を紹介している。

2.3.2. フィクション作品の言語的ジェンダー表現

フィクション作品の言語的ジェンダー表現に関する先行研究として平岡 (2018) を取り上げる。平岡 (2018) はディズニープリンセス映画の言語的ジェンダー表現を調査し、作品が新しいほど女性的表現が弱まっていることを明らかにした。文末表現において女性らしさを損なう男性形式は避けられている

ものの、女性形式の使用が減り中性形式の使用が増えていることがわかった。

2.4. 仮説

自然談話に関する先行研究では脱「女性語」化が指摘されており、ディズニープリンセス映画に関する先行研究では、言語的ジェンダー表現は作品が新しいほど弱くなっていることがわかった。本研究の調査対象も同様に、新しい記事ほど言語表現に見られる女性らしさは軽減されていると仮説を立てることにする。

3. 調査方法

本節では、本研究で行った調査の方法を述べる。まず調査対象を限定し、次に調査方法を詳しく説明する。

3.1. 調査対象

本研究では女性ファッション誌 *VOGUE JAPAN* の記事を調査する。*VOGUE JAPAN* は世界で影響力のあるファッション誌 *VOGUE* の日本版として 1999 年に創刊された。ウェブサイト版では 2015 年に日本の女性ファッション誌のウェブサイト中で PV 数（ページが閲覧された回数）第一位になるなど、人気の雑誌である。コンデナストジャパンの 2018 年メディアガイドによるとオーディエンス（読者）は 20～40 代の未婚女性が多く、男女比は男性 6.3% に対して女性 93.7%、年齢層は 20 歳～49 歳が全体の 83.9% を占める。

VOGUE JAPAN の記事には様々な内容のものがあり、ホームページでは FASHION、BEAUTY など 7 分野に大別されている。本研究では以下の条件に合う内容の記事を検証する。

- ① 海外のシスジェンダー女性のセレブリティについての内容である。
- ② 海外女性セレブリティの発言が含まれている。

①について説明する。人の性・ジェンダーは様々であり、生まれたときに割り当てられた性と自分で認識している性が同じである場合も、そうでない場合もある。そのうちシスジェンダー (cisgender) 女性とは、生まれたときに割り当てられた性別が女性で、自分で認識している自分の性が女性である人のことである³。*VOGUE JAPAN* にはドラッグクイーンのリ・ポールを取り上げた記事などもあったが、本研究の標本には加えなかった。ドラッグクイーンとはきらびやかな女装でパフォーマンスをする人のことで、シスジェンダー女性でない場合が多い。シスジェンダー女性以外の人の言葉遣いをどのように扱うか考える際、河野 (2016) を参考にした。河野 (2016) は近年メディアなどで活躍する「おネエ (系) キャラクタ」の人称について研究する際、「おネエ」の定義として「生

³ 「シスジェンダーとは？【セクシュアル“マジョリティ”？】」Job Rainbow Magazine, 2020 年 8 月 24 日 <https://jobrainbow.jp/magazine/cisgender>

物学的に男性だが（あるいは男性であったが）、装い・しぐさ・言葉遣いなどで女性ジェンダーの特徴を有する人」（p. 115）を採用している。よってドラァグクイーンと「おネエ」を同一視して良い場合が多いと言える。また、中村（2010）は「おネエ」が話す「おネエことば」について、ジェンダー規範を利用しつつも、その規範を越境する創造的な言語行為であると述べている（p. 23ff., p 39）。このことから本研究を行うにあたり、ドラァグクイーンなどシスジェンダー女性以外と思われるセレブリティの言葉遣いを、シスジェンダー女性のセレブリティの言葉遣いと同様に扱うべきではないという考えに至った。自分らしさを獲得しようとするとき、シスジェンダー女性に既存の女性規範から脱却しようという傾向が、ドラァグクイーンや「おネエ」に既存の女性規範を利用し超越しようという傾向があるならば、シスジェンダー女性の言葉遣いは中性化、ドラァグクイーンや「おネエ」の言葉遣いは女性化しているのではないかと、また日本語の記事もそれを反映しているのではないかと予想したからである。

本研究では、アクセス可能であるという点から、2014年以降の記事を各年10本抽出して調査する。標本はセレブリティの発言が多く含まれていることを期待してVOICEという分野にまとめられている記事を中心に選んだ。そして、その年全体の動向をつかむことを期待して、記事の発行日がなるべく多くの月に散らばるように抽出した。散らばり方は2018年と2019年が8か月、2017年と2020年が7か月、2014年と2016年が6か月、2015年が5か月となった。

3.2. 調査方法

調査方法は以下の通りとする。

- ① 記事で取り上げられている女性セレブリティの発言を抽出する
- ② 発言の文末表現に注目し、有泉（2013）による文末表現の分類を参考に「女性形式」を数える
- ③ 発言総数のうち「女性形式」が使用されている割合を各年で比較し、考察する

①について説明する。インタビュアーによる質問とセレブリティによる回答が交互になされている記事の場合、セレブリティの解答のみを抽出する。セレブリティの発言の引用を交えつつセレブリティについて書かれた記事の場合、セレブリティの発言の引用のみを抽出する。

②について説明する。言語的ジェンダー表現には様々なものがあり、陳（2013）は従来の研究におけるジェンダー表現の捉え方を以下のように整理している。

	男性的表現	女性的表現
終助詞・助動詞類	ぞ、ぜ、だろ、な、よな、かい、 のか、や、な、やな、やろう	わ↑(わよ、わね、わよね)、 かしら、のよ、のね、なの、 名詞+ね/よ/よね)
感動詞	おい、こら	あら、まあ
美化語		例：お台所、お写真
人称代名詞	おまえ、君、こいつ、あいつ	
崩れた音声 (形容詞の崩れた形/ 拗音化)	例：ない→ねー 知らない→知らん	
ぞんざいな語彙表現 (形容詞・動詞・名詞 のぞんざいな形)	例：大きい→でかい 食べる→食う ご飯→飯(めし)	
命令表現	例：～てくれ、黙れ	
禁止表現	例：するな	

(表1) 陳 (2013) によるジェンダー表現の整理

本研究では、このうち終助詞などの文末表現を調査する。その理由の1つ目は佐々木(2009)が「わ」をはじめとする女性らしい終助詞について『彼女は女性らしい話し方をする』『彼女、言葉遣いがひどいんですよ』といった評価は、しばしばこの終助詞の使い分けで判断される」(p. 502)と指摘しているように、終助詞が発話全体の印象を左右するほど大きな力を持っていることである。2つ目は、文末に使用される表現であることから数えやすく、発言全体における割合を比較するのに適していると考えたからである。本研究では、平岡(2018)でも使用された有泉(2013)による文末表現の分類を参考に文末表現を数える。有泉(2013)は会話の文末表現について、話者のジェンダーに関する印象形成の研究をもとに、男性と関係がある(男性用と認識される)ものを「男性形式」、女性と関係がある(女性用と認識される)ものを「女性形式」、それ以外を「中性形式」とした。さらに、多くの文末表現について男性用と女性用どちらであると思うか、一方の性別にどれくらい偏って使用されていると思うかを回答者に選択させる調査をし、ジェンダー-特異性を得点として付与した。その結果に基づいて「女性形式」は「排他的女性形式」「高特異女性形式」「低特異女性形式」の3段階に分類された。「排他的女性形式」はジェンダーに反した使用が通常では考えられないほど女性性が強い文末表現、「高特異女性形式」は女性性が比較的強く、ジェンダーに沿った使用が多いと考えられている表現、「低特異女性形式」は女性性が比較的弱く、話者の性別にあまり関わりなく使用されると考えられている表現である。「男性形式」も同様に3段階に分類された。調査の結果、文末表現は以下の表2のように分類された。(p. 66)

分類カテゴリ	文末表現（直前の語形）	ジェンダー特異性 得点分布
排他的男性形式	だぜ（名詞）	1.20
高特異男性形式	だろ（名詞）、だろ（動詞連体形）、んだろ（動詞連体形）、 んだぜ（動詞連体形）、ぞ（形容詞）、だい（名詞：疑問 形）、かい（名詞：疑問形）、よな（動詞連体形）	1.47 以 上、1.80 以下
低特異男性形式	だ（名詞）、んだ（動詞連体形）、んだ（形容詞連体形）、ん だよ（動詞連体形）、だな（名詞）、だよ（名詞）、（の）か （動詞連体形：疑問形）、な（動詞連体形）、だろう（動詞連 体形）	2.00 以 上、2.53 以下
排他的女性形式	わ（動詞連体形）、わよ（動詞連体形）	3.73 以上
高特異女性形式	なの（名詞）、ね（名詞）、よ（名詞）、かしら（動詞連体 形）、よね（名詞）、のね（動詞連体形）、のよ（動詞連体 形）、なのよ（形容詞連体形）	3.40 以 上、3.67 以下
低特異女性形式	ね（動詞連体形）、でしょうね（名詞）、でしょ（動詞連体 形）、んでしょ（動詞連体形）、でしょう（動詞連体形）、の （動詞連体形）、の（動詞連体形：疑問形）、んだもん（動詞連体 形）	2.47 以 上、3.00 以下
中性形式	かな（名詞）、から（動詞連体形）、わけ（動詞連体形）、よ （動詞連体形）	2.40 以 上、2.60 以下

（表2）有泉（2013）による文末表現の分類

本研究では上記の分類のうち「排他的女性形式」「高特異女性形式」「低特異女性形式」に基づいてセレブリティの発言の日本語訳を調べる。また、調査対象には「中性形式」に分類される文末表現も多く見られたが、本研究では「その他」として、ですます調の文や体言止めの文などと同じ扱いにする。

また、有泉（2013）では取り上げられていなかったが調査対象の中で見られた女性的と思われる文末表現の扱いについて述べる。「わね」「わよね」は「わ」「わよ」と同じ「わ」が含まれることから排他的女性形式として数えた。「じゃない」（例：超メタな感じでいいじゃない⁴）はセリーヌ（2009）が「男性にとって女らしい言葉」として挙げていることから、「もの」（例：こぞってときに力が発揮できないと、意味ないもの⁵）は金水（2009）が「女性専用表現」として挙げていることから、どちらも女性性が比較的強く、ジェンダーに沿った使用が多いと考えられるため高特異女性形式に分類することとする。

③に関し、発言数の定義について説明する。発言は句点（。）、疑問符（？）、

⁴（「ケイティ・ペリーという名のアーティスト。」VOGUE JAPAN 2015年9月29日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2015-09/29/katy-perry>）

⁵（「ケイティ・ペリーという名のアーティスト。」VOGUE JAPAN 2015年9月29日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2015-09/29/katy-perry>）

感嘆符（！）で数えるものとする。鍵括弧の文末で句点が用いられていない場合も一文として数える。ただし、発言の中に引用などが含まれている場合は以下のように数える。

- A) 発言の中に女性セレブリティ自身の発言や考えなどが含まれている場合は、全ての句点、疑問符、感嘆符を発言数に数える。

例 2) 「自分の選択には驚かされるわ。『何であんなことをしたんだろう？』
と思うことも。『なぜ、あんな結論になったの？何が悪いの？なぜ？』って」⁶

このとき、『何であんなことをしたんだろう？』『なぜ、あんな結論になったの？何が悪いの？なぜ？』の発言者は女性セレブリティ自身であるので、女性セレブリティの発言数は7とする。

- B) 発言の中に他者の発言や一般論などが含まれている場合は、その部分を発言数として数えない。

例 3) 「だけど、今回の騒ぎに関してみんなが異口同音に言うのが『それで、この状況からもたらされる好機は？』ってことなのよ」⁷

このとき、『それで、この状況からもたらされる好機は？』の発言者は「みんな」であり女性セレブリティではない。よって女性セレブリティの発言数は1とする。

また、調査対象にはインタビュー動画形式の記事も含まれる。セレブリティの発言について字幕のうち、句点や感嘆符を入れることができるかどうかを考え、文として完結したまとまりを発言数として数える。

例 4) 「たくさん楽しいシーンはあったけれど
最高に楽しかったのはメリーゴーラウンド！
一緒に写真に写ってくれた女の子たちのスタイルが素敵だったわ

⁶ (Zack Baron「人生の節目を迎えたマイリー・サイラスの告白——自宅の全焼、そして結婚。」VOGUE JAPAN 2019年6月25日 <https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2019-06-25/miley-cyrus>)

⁷ (LOUIS WISE「想像をかき立てるアーティスト、アレクサンドラ・グラントとは。」VOGUE JAPAN 2020年6月26日 <https://www.vogue.co.jp/celebrity/article/alexandra-grant-interview>)

カールしたラベンダーの髪も彼女たちの洋服も大好きだった」⁸

このとき、1行目と2行目は1つの文として数え、発言数は3とする。

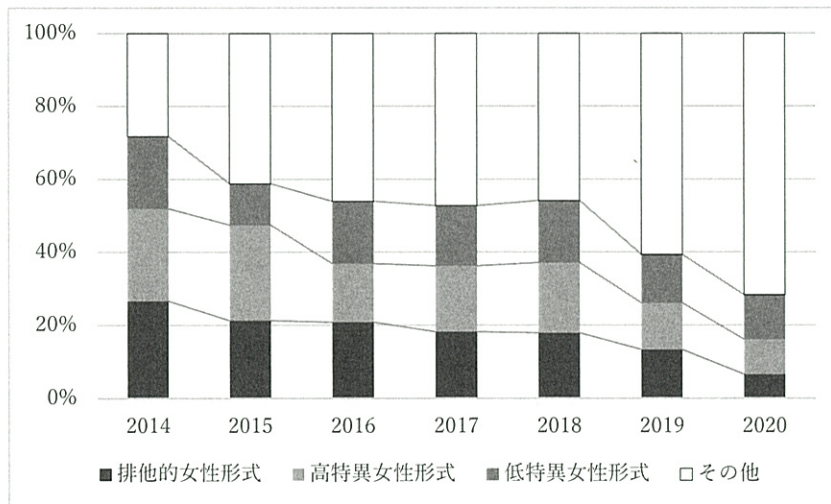
4. 調査結果

調査結果を表にまとめると以下のようなになる。

(表3) 女性形式使用率の集計結果

	排他的女性形式	高特異女性形式	低特異女性形式	女性形式	その他
2014	26.6%	25.4%	19.8%	71.8%	28.2%
2015	21.3%	26.2%	11.4%	58.8%	41.2%
2016	20.8%	16.0%	17.1%	53.9%	46.1%
2017	18.2%	18.0%	16.5%	52.7%	47.3%
2018	17.9%	19.3%	17.0%	54.1%	45.9%
2019	13.3%	12.8%	13.2%	39.3%	60.7%
2020	6.5%	9.6%	12.2%	28.3%	71.7%

グラフにまとめると以下のようなになる。

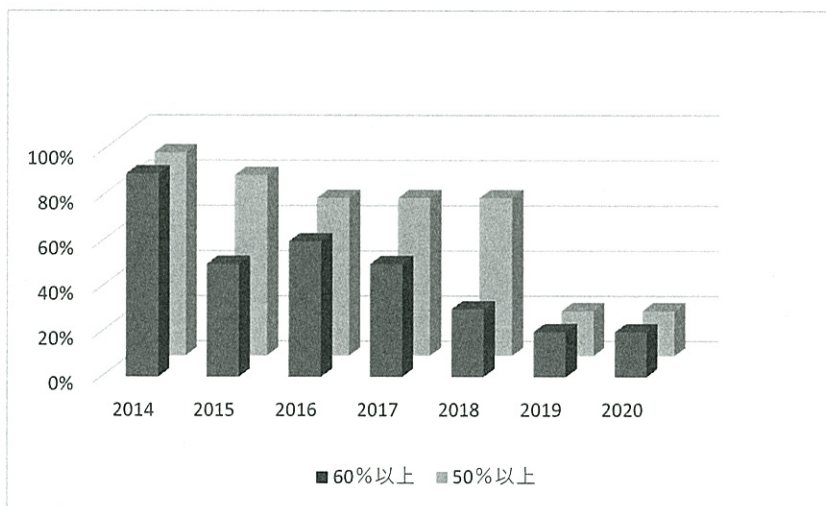


(グラフ1) 女性形式使用率の推移

⁸ 「アリアナ・グランデ in TOKYO。VOGUE JAPAN ユーザーにスペシャルメッセージ」
VOGUE JAPAN, 2015年9月25日 <https://youtu.be/CLEgWnI3f1g>

文末表現に女性形式が使用される割合は年々減少傾向にあることが分かった。その中でも排他的女性形式は特に減少傾向が強い。高特異女性形式にも減少傾向が見られる。低特異女性形式もやや減少傾向にある。一方で女性形式以外の文末表現は増加傾向にあると言える。

また、各年 10 の標本のうち、女性形式の使用される割合が 60%以上の記事と 50%以上の記事の割合の変化をグラフにまとめると以下ようになる。



(グラフ 2) 女性形式使用率が 50%以上、60%以上の記事の割合

どちらも減少傾向にあることが分かる。このことから、文末に女性形式を多用した記事は年々減っていることが分かる。

5. 考察

言語的ジェンダー表現を用いてセレブリティの発言を日本語訳することは、読み手にセレブリティの人物像を正確に伝えるための工夫と言える。しかし、実際の人物像に沿わないキャラクタづけとすることもできる。陳 (2013) は「女性的表現」について、「現実の女性の言葉づかいではなく、社会規範をサポートする機能を持っている。『上品さ』、『可愛らしさ』、『綺麗さ』等をマークし、アイデンティティ構築に機能できる『女性的表現』が、現実社会で使われず、その機能がフィクションの世界にとどまっている。このような女性像は現実社会とはかけ離れた存在であるが、人々の思考の中では日本社会のステレオタイプとして存在し続けている」(p. 261) と指摘する。セレブリティの発言に対しても同様に、翻訳家が思考の中に存在するステレオタイプを投影して翻訳し、また読者がある程度ステレオタイプの女性像を期待していると考えため、言語的ジェンダー表現を用いて訳されるのではないかと考える。「排他的女性形式」に分類される文末表現「わ」について尾崎 (1999) は以下のように説明している。「『わ』の直前までの主張や判断をそのままストレートに相手に

表現せず、その発話内容を、相手に直接関わらない自己の詠嘆として一度内在化させ、その自己の思いの発露という形で相手に間接的に主張するというやり方と言える。主張の方向を相手ではなく、いわば自己に向けることを通し、相手に対する主張の度合いを和らげているのである」(p. 65)。主張の度合いを和らげるとは、まるで既存の女性規範すべてを反映したような行為である。本研究の標本には女性形式を用いて訳されているものであっても意見を主張していると感じられるものが多かった。しかしそれはセレブリティという立場が可能にしているとも考えられ、女性形式が主張を和らげないと言い切ることはできない。女性形式を用いても主張をある程度伝えることができるが、女性形式が既存の女性規範を彷彿とさせるのは否定できない。女性形式の減少が見られたのは、女性雑誌がそのことを反映したからではないかと考える。

また、標本の中に少数ではあるが「です」「ます」など丁寧語の文末表現が用いられている記事もあった。2018年1月の「女優フェリシティ・ジョーンズが教えてくれた、とっておきの美の秘訣。」にはくだけた口調の中に丁寧語の文末表現がところどころ織り交ぜられて使用されている。発言のうち41.1%が女性形式を用いて訳されているが、残り58.0%のうち17.9%には丁寧語の文末表現が用いられていた。丁寧語とそれ以外を織り交ぜて使用することで、改まった印象とカジュアルな印象を融和させようという狙いがあったのではないかと考える。2019年3月の「ナタリー・ポートマン——大人になった女優が得た新たな光。」では、ナタリー・ポートマンが公的な場でした発言内容を振り返る箇所に用いられている。また、2020年6月の「アンジェリーナ・ジョリー独占インタビュー。『私たちは、戦争の終結も苦しむ人への援助も十分にできていない』」では発言全てにおいて敬語が用いられていた。丁寧語は敬語のひとつである。敬語は聞き手や読み手など相手の人物を高めたり、相手に対して改まった気持ちや丁寧な気持ちを表したりする表現である。敬語以外の話し言葉と比べると、礼儀正しく公的で改まった印象を与えようと言える。自然談話における敬語使用の頻度は性や世代による違いが指摘されている⁹ものの、敬語そのものにはジェンダー特異性がない。どのような人物の発言に対して、またどのような話題のときに丁寧語の文末表現が用いられるのかは本研究の標本から明らかにすることができなかった。しかし先行研究と本研究から、様々な分野の言語表現において女性的性質が弱まっていることを示された。また最近では#MeToo、BlackLivesMatter、新型コロナウイルスの感染拡大、アメリカ大統領選挙など、一般人の生活に大きく関わる社会的・政治的な出来事が頻発しており、それらに対するセレブリティの見解も多く示されている。公的な問題についての意見は公的な言葉遣いで訳される可能性も高いと考える。これらのことから筆者は今後丁寧語の記事も増えると予想する。

⁹ 「敬語の指針」2007年、文化庁 p. 8

6. おわりに

調査の結果、日本語話者以外の女性セレブリティを取り上げた記事において言語的ジェンダー表現が年々減少していることがわかった。

最後に、本研究の問題点を4点挙げて今後の課題として提示する。1点目は、標本が *VOGUE JAPAN* に限られたことである。今後は他の年齢層をターゲットにした女性ファッション誌や、男性誌、映画雑誌、また新聞やテレビにおける海外女性セレブリティの発言も検証し、各メディアがセレブリティをどのように映し出しているか明らかにすべきである。2点目は、調査対象について述べたように、標本をシスジェンダー女性のセレブリティの発言に限ったことである。シスジェンダー女性以外の人々の言葉遣いや、その日本語訳も重要な分野であるので、今後検証するべきである。3点目は、考察で述べたように、丁寧語に関して十分な調査ができなかったことである。今後は標本数を増やし、どのような人物の発言に対して、またどのような話題の発言に対して丁寧語の文末表現が用いられるのかを調査していく必要があるだろう。4点目は、言語的ジェンダー表現のうち文末表現以外を調査しなかったことである。今後は感嘆詞や美化語なども調査していく必要があるだろう。

一次資料

VOGUE JAPAN (2014年3月号～2020年10月29日号)

「ダコタ・ファニング---20歳の彼女が目指す、理想の女性と良作の選びかた」*VOGUE JAPAN*, 2014年3月5日

<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2014-03-dakota-fanning>

「オスカー女優ケイト・ブランシェットの挑戦。ウディ・アレンが描く、転落セレブの世界とは？」*VOGUE JAPAN*, 2014年5月2日

<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2014-05-cate-blanchett>

「ミランダ・カーに直撃！輝き続ける美とパワフルな原動力の秘密に迫る。」*VOGUE JAPAN*, 2014年4月11日

<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2014-04-miranda-kerr>

「今最も輝く女優エマ・ストーン流、夢の叶え方。」*VOGUE JAPAN*, 2014年4月21日 <https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2014-04-emma-stone>

「スカーレット・ヨハンソン、いよいよ来月に挙式!？」*VOGUE JAPAN*, 2014年7月22日 <https://www.vogue.co.jp/celebrity/news/2014-07/22/scarlett-johansson>

「エミリー・ブラントの新境地。『これまで出会った中で、これほど独特なラブストーリーはない。』」*VOGUE JAPAN*, 2014年7月2日

<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2014-07-emily-blunt>

「レア・セドゥ、美の秘訣は湯船の後に水シャワー!？」*VOGUE JAPAN*, 2014年11月20日 <https://www.vogue.co.jp/celebrity/news/2014-11/20/lea-seydoux>

- 「アンジェリーナ・ジョリー、ブラッド・ピットのために料理をお勉強!？」
VOGUE JAPAN, 2014年11月27日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/news/2014-11/27/angelina-jolie>
- 「ニコール・キッドマン、あと4人子供が欲しい!？」 VOGUE JAPAN,
2014年12月1日 <https://www.vogue.co.jp/celebrity/news/2014-12/01/nicole-kidman>
- 「リリー・コリンズ、『あと1センチの恋』で開いた新境地。」 VOGUE
JAPAN, 2014年12月13日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2014-12/lily-collins>
- 「エリザベス・オルセン、『私のヒーローは家族』と語る彼女の新しい挑戦。」
VOGUE JAPAN, 2015年7月3日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2015-07/elizabeth-olsen-in-avengers>
- 「エラ・リチャーズ、ロンドンが生んだ新生 It ガールの素顔。」 VOGUE
JAPAN, 2015年8月6日
<https://www.vogue.co.jp/fashion/interview/2015-08/06/ella-richards>
- 「ミランダ・カー、キレイの秘訣はヨガにアリ!」 VOGUE JAPAN, 2015年
8月7日 <https://www.vogue.co.jp/celebrity/news/2015-08/07/miranda-kerr>
- 「カーラ・デルヴィーニュ、長編映画デビュー作『天使が消えた街』で演じた
“希望の象徴”。」 VOGUE JAPAN, 2015年9月1日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2015-09/cara-delevingne>
- 「アリアナ・グランデ in TOKYO。VOGUE JAPAN ユーザーにスペシャルメ
ッセージ」 VOGUE JAPAN, 2015年9月25日
<https://youtu.be/CLEgWnI3f1g>
- 「エリザベス・オルセン、あなたが知りたいかもしれない彼女の17のこと。」
VOGUE JAPAN, 2015年9月28日
https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/VJ102-Interview-2015-00_ORIG_ElizabethOlsen
- 「ケイティ・ペリーという名のアーティスト。」 VOGUE JAPAN, 2015年9月
29日 <https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2015-09/29/katy-perry>
- 「フォトグラファーのメアリー・マッカートニーが明かす、デビアス
『Moments of Light』の撮影秘話。」 VOGUE JAPAN, 2015年10月6日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2015-10/06/mary-mccartney>
- 「オリヴィア・パレルモ、ファッションアイコンの素顔。」 VOGUE JAPAN,
2015年11月2日 <https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2015-11/olivia-palermo-for-max-co>
- 「ヒラリー・スワンクがキャリア至上最難関の役に挑戦。ALSを発症した主人
公が気づいた大切なこととは?」 VOGUE JAPAN, 2015年11月7日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2015-11/hilary-swank>

- 「ケイト・ブランシェット、美しくあるための7つの秘訣。」VOGUE JAPAN, 2016年1月28日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2016-01/cate-blanchett>
- 「カロリーヌ・ド・メグレからのメッセージ。「ファッションに必要なのは”客観性”」。VOGUE JAPAN, 2016年4月7日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2016-04/caroline-de-maigret>
- 「ロージー・ハンティントン＝ホワイトリーが語る、ハッピー&ヘルシーボディの作り方。」VOGUE JAPAN, 2016年4月14日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2016-04/rosie-huntington-whiteley>
- 「レイチェル・マクアダムス、キュートな魅力を放つ37歳の今。」VOGUE JAPAN, 2016年4月21日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2016-04/rachel-macadams>
- 「ミア・ワシコウスカがアリス役でカムバック！ 奇才に愛される彼女の等身大の魅力に迫る。」VOGUE JAPAN, 2016年7月1日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2016-07-mia-wasikowska>
- 「ファーギー来日インタビュー！ 母親業とクリエイションのバランスを取る秘訣。」VOGUE JAPAN, 2016年8月25日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2016-08-fergie>
- 「エミリア・クラークが語る『世界一キレイなあなたに』作品秘話。『こんなにも自分に近いキャラクターを演じるチャンス、これまでなかった』」VOGUE JAPAN, 2016年10月1日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2016-10-01>
- 「アリシア・ヴィキャンデルが初来日！ 北欧出身女優がオスカー像を獲得するまで。」VOGUE JAPAN, 2016年10月8日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2016-10-alicia-vikander>
- 「ジジ・ハディッドに聞きました！ そのスタイルのルーツと気になる私生活。」VOGUE JAPAN, 2016年11月4日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2016-11-gigi-hadid>
- 「ケンダル・ジェンナー、女性として生きる父について、ロングインタビュー。」VOGUE JAPAN, 2016年11月13日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2016-11-kendall-jenner>
- 「アカデミー主演女優ブリー・ラーソンが魅せた、SF大作『キングコング：髑髏島の巨神』での新たな挑戦。」VOGUE JAPAN, 2017年3月31日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2017-03-brie-larson>
- 「ジュリエット・ビノシュ、円熟した演技の裏にある女優哲学とは？」VOGUE JAPAN, 2017年4月6日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2017-04-juliette-binoche>
- 「『なぜ男たちはいつも女にただにこにこ笑っていることを求めるの？』エマ・ワトソンが闘う理由。」VOGUE JAPAN, 2017年5月13日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2017-05-emma-watson>

「カヤ・スコデラリオ、25歳の新米ママが『パイレーツ〜』最新作の強く、賢く、美しいヒロインに！」VOGUE JAPAN, 2017年6月29日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2017-06-kaya-scodelario>

「『みんな、革命を起こす用意はできてる？』時代と共に闘う女、マドンナ。」VOGUE JAPAN, 2017年7月6日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2017-07-madonna>

「過激な役柄にも果敢に挑戦！エル・ファニングの知られざる一面とその魅力。」VOGUE JAPAN, 2017年7月25日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2017-07-elle-fanning>

「セレーナ・ゴメスの告白。情緒不安定、波乱万丈だった10代を振り返る。」VOGUE JAPAN, 2017年8月20日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2017-08-selena-gomez>

「イザベル・ユベール64歳。『エル』での“ポスト・フェミニズム”を語る。」VOGUE JAPAN, 2017年8月24日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2017-08-isabelle-huppert>

「ニコール・キッドマンが演じる女性のリアリティとは？笑って、泣いた分だけ強くなる！」VOGUE JAPAN, 2017年8月27日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2017-08-nicole-kidman>

「シャーリーズ・セロンは、タフでワイルドな『女性版ジェームズ・ボンド』！」VOGUE JAPAN, 2017年12月23日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2017-12-Charlize-Theron>

「女優フェリシティ・ジョーンズが教えてくれた、とっておきの美の秘訣。」VOGUE JAPAN, 2018年1月25日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2018-01-Felicity-Jones>

「テイラー・ヒル、バッグの中の手放せない旅アイテムを紹介。」VOGUE JAPAN, 2018年8月9日
<https://www.youtube.com/watch?v=8TrPar2Lv0g&feature=share>

「2016年グラミー賞の、若者たちへのあのスピーチ。【テイラー・スウィフトの金言 vol.1】」VOGUE JAPAN, 2019年12月16日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/article/2019-12-16-taylor-swift-quotes>

「ヘレン・ミレン72歳、飽くなき好奇心で今を生きる。」VOGUE JAPAN, 2018年4月9日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2018-04-helen-mirren>

「エル・ファニング、ネズミと踊った誕生日の思い出。」VOGUE JAPAN, 2018年4月22日
<https://www.youtube.com/watch?v=QGR9YVxs3jk&list=PL1Qvp-F5fnLho2XxccOkLKrQ87zTYHaKP&index=45>

「カミラ・カベロが語る、アメリカで移民としての心を歌うこととは。」VOGUE JAPAN, 2018年6月9日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2018-06/camila-cabello>

- 「ジェーン・フォンダ——女優と社会活動家の終わりなき挑戦。」VOGUE JAPAN, 2018年7月28日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2018-07/jane-fonda>
- 「クレア・フォイが語る、新作『プレス しあわせの呼吸』、『ザ・クラウン』、そして子供のこと。」VOGUE JAPAN, 2018年9月6日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2018-09-Claire-Foy>
- 「アン・ハサウェイ——何を言われようが、『気にしない』と言えるまでの道のり。」VOGUE JAPAN, 2018年10月15日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2018-10/anne-hathaway>
- 「マドンナが語る新天地リスボンでの日々。」VOGUE JAPAN, 2018年11月17日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2018-11-madonna-1>
- 「ミシェル・ウィリアムズ——試練を乗り越え自由を手に入れた彼女が、今伝えたいこと。」VOGUE JAPAN, 2018年11月26日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2018-11-michelle-williams>
- 「キャリー・マリガン——圧倒的な演技力で、限界に挑み続ける。」VOGUE JAPAN, 2019年1月29日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2019-1-carey-mulligan>
- 「フェリシティ・ジョーンズが語る、『85歳の現役最高裁判事を演じる意義』。」VOGUE JAPAN, 2019年3月22日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2019-03-22/felicity-jones>
- 「ナタリー・ポートマン——大人になった女優が得た新たな光。」VOGUE JAPAN, 2019年3月23日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2019-03-11/voiceoflight>
- 「アマンダラ・ステンバーグ、アメリカを揺らす20歳の女優活動家の挑戦。」VOGUE JAPAN, 2019年4月25日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2019-04-xx/making-a-splash>
- 「人生の節目を迎えたマイリー・サイラスの告白——自宅の全焼、そして結婚。」VOGUE JAPAN, 2019年6月25日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2019-06-25/miley-cyrus>
- 「大坂なおみの未来——女子テニス界で自分だけの道を切り開く。」VOGUE JAPAN, 2019年6月24日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/interview/2019-06-24/naomi-osaka>
- NATALIE EVANS-HARDING 「『学ぶためには負ける必要がある』——ヴィーナス・ウィリアムズを撃破したコリ・“ココ”・ガウフ、15歳の挑戦。」VOGUE JAPAN, 2019年8月25日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/article/2019-08-25-cori-coco-gauff>
- HATTIE COLLINS 「『正義が脅かされるくらいなら戦うわ!』——デュア・リパという魔法。」VOGUE JAPAN, 2019年9月5日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/article/2019-09-05-dua-lipa-cnihub>

- KIMBERLY DREW 「ルピタ・ニヨンゴが語る、人生を変えた映画とファッション。」 VOGUE JAPAN, 2019年11月27日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/article/2019-11-27-lupita-nyongo-interview>
- ZING TSJENG 「リゾ——新時代の歌姫が語る信じること、愛することの大切さ。」 VOGUE JAPAN, 2020年1月23日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/article/2020-01-23-lizzo-interview>
- SHUNTA ISHIGAMI 「『常に変化しながら自分の道を選びたい』——リム・キムが目指す新しい『K-POP』。」 VOGUE JAPAN, 2020年2月26日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/article/2020-02-26-lim-kim>
- YUKI TOMINAGA 「輝きを増したレネー・ゼルウィガーが VOGUE に語った、オスカーとハリウッドの変化。」 VOGUE JAPAN, 2020年3月5日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/article/2020-03-05-renee-zellweger-interview>
- 「エマ・ワトソンのバッグの中身を公開！」 VOGUE JAPAN, 2020年5月24日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/article/vj102-inthebag-2020-emmawatson>
- GABY WOOD 「注目の若手女優フローレンス・ピュー。既存のルールを歩まずスターに上り詰めたその軌跡。」 VOGUE JAPAN, 2020年5月24日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/article/florence-pugh-interview>
- LIAM FREEMAN 「アンジェリーナ・ジョリー独占インタビュー。『私たちは、戦争の終結も苦しむ人への援助も十分にできていない』」 VOGUE JAPAN, 2020年6月28日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/article/angelina-jolie-on-the-global-refugee-crisis-and-motherhood-cnihub>
- LOUIS WISE 「想像をかき立てるアーティスト、アレクサンドラ・グラントとは。」 VOGUE JAPAN, 2020年6月26日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/article/alexandra-grant-interview>
- ELLIE AUSTIN 「007 シリーズに新風をもたらすラシャーナ・リンチ、その変革への意志。」 VOGUE JAPAN, 2020年8月27日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/article/007-lashana-lynch-interview>
- 「グウィネス・パルトロウが魅せる生き方提案とは。新オフィスも初公開。」 VOGUE JAPAN, 2020年10月24日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/article/gwyneth-paltrow-office-hours-interview>
- 「ジェニファー・ローレンス、民主党支持を表明。」 VOGUE JAPAN, 2020年10月29日
<https://www.vogue.co.jp/celebrity/article/jennifer-lawrence-proud-to-be-a-democrat>

参考文献

- 有泉優里 (2013) 「会話文末における『男ことば』と『女ことば』の分類：ジェンダー表現識別傾向とジェンダー特異性を指標として」日本語ジェンダー学会『日本語とジェンダー』13, pp. 63-72.
- 井上輝子・江原由美子・上野千鶴子 (1995) 『日本のフェミニズム7 表現とメディア』岩波書店.
- 尾崎喜光 (1999) 「女性語の寿命」『日本語学』18(9), pp. 60-71.
- 河野礼実 (2013) 「“おネエ”キャラクターの人称」お茶の水女子大学『比較日本学教育研究センター研究年報』12,
- 金水敏 (2009) 『ヴァーチャル日本語 性役割の謎』岩波書店.
- コンデナスト・ジャパンメディアガイド(2018)
https://condenast.jp/wp-content/uploads/2017/03/JVOGUE_mediaguide_2018_10-12_ver1.0.pdf
- 佐々木瑞枝 (2009) 『日本語ジェンダー辞典』東京堂.
- 高崎みどり (1988) 「模索期の女性語」現代日本語研究会『ことば』9, pp. 23-40.
- 高崎みどり (2004) 「話し言葉の性差 (ジェンダー) —男性の『女性語』使用とジェンダーの関わりに注目して—」『明治大学人文科学研究紀要』54, pp. 159-173.
- 陳一吟 (2013) 『日本語におけるジェンダー表現 —大学生の使用実態及び意識を中心に—』花書院.
- 中村桃子 (2010) 「ことばで装うジェンダー (第2回講演)」大阪府立大学女性学研究センター『女性学連続講演会』14, pp. 17-47.
- 平岡緋奈子 (2018) 「ディズニープリンセス映画に見る言語的ジェンダー表現」金沢大学人間社会学域経済学類社会言語学演習『論文集』第13巻 pp. 97-111.
- セリーヌ・パケ (1997) 「日本語の中の男と女、そして社会」広島大学留学生センター『日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 1996』pp. 49-60.
- 水田宗子 (2005) 「メディアのジェンダー構造と女性表現」北九州市立男女共同参画センター“ムーブ” 大学比較日本学教育研究センター『ジェンダー白書 3 女性とメディア』pp. 20-43.